

進路学習に於ける進路志望形成過程の研究

－「職業調べ学習」・「学部調べ学習」・「広島大学見学学習」を通して－

三宅 幸信 ・ 村山 太郎 ・ 服部 裕一郎

本稿は、当校第3学年（2009年度）の進路学習の取り組みを紹介し、とりわけ「広島大学見学学習」（2009年11月2日（月）実施）を取り上げ考察の観点とし、本学年の進路学習の成果を報告するものである。ここでは、本学年進路指導の特徴を述べ、第1学年と第2学年での実際の取り組みを紹介する。また、第3学年の取り組みの紹介では、「広島大学見学学習」実施前後を通じて生徒たちの大学のイメージがいかに変容したかを明らかにし、そのことが生徒にいかなる力を育むことになったのかを詳述する。

1. はじめに

本稿は、2009年11月2日（月）に実施した「広島大学見学学習」に関して生徒たち（第3学年）が記述した諸資料を分析・考察することで、そこで生徒たちに生じた出来事を記述し、以て本学年の進路学習成果の一斑を報告するものである。

2. 中学1, 2年生での進路学習

周知の通り、2009年度11月2日（月）実施の「広島大学見学学習」は、「生徒一人一人が、自らの将来の生き方への関心を深め、将来への展望をもち、主体的に進路計画を構想し、目標の実現にむけて、能力・適性の開発と発達を実行する」（広島大学附属福山中・高等学校進路指導部、2009）という当校の進路指導の理念に即して、本学年団が他の学年団の取り組みに学びつつ第3学年において設定実施した進路学習の一環である。また、上記のねらいに即して各学年別に進路学習の目標とテーマを設定するわけだが、それを6ヵ年一貫の指導体制のなかで実践している点で、体系的な実践の3ヵ年目に当たるものでもある。従って「広島大学見学学習」は、本学年にとって中学就学期進路学習の集大成でもある。そこで本節では、「広島大学見学学習」を俎上にのぼせる前に、本学年がそれまでにいかなる進路学習（中学2ヵ年（2007年度～2008年度実践））を体験してきているのかをまずは概観したい。

2-1. 概要

第1学年時及び第2学年時の進路学習の目標は以下の通り。

○第1学年：自らの将来のあり方について関心を持ち、自己の能力・適性を開発し伸ばすことに意欲を持つ。また、他者の進路を尊重する態度を身につける。

○第2学年：自らの興味関心の所在から将来のあり方を探りつつ、現在の自分の課題を考える。また、将来独り立ちして生きていくということを自分のこととして受け止める。

これらの目標の実現に向け、第1学年では『職業調べ学習』、第2学年では『学部調べ学習』をテーマにして進路学習を行った。もちろん、これらのテーマはそれぞれ独立したのではなく、互に関連したものである。将来なりたい職業・職種について思いを致し、仕事内容や必要な技能・資格を調べる第1学年の進路学習と、その職業に就くためにはどのような学部・学科が存在するのかを調べ、具体的な学部・学科を定めて講義内容にまで踏み込みグループ発表する第2学年の進路学習とは、自己の進路を具体化する上での有効な手立てを獲得したり考えたりできる点で関連性があり、後者が前者の発展学習となっている。むろんこうした配慮は、第3学年の進路学習も同様で、「広島大学見学学習」では広島大学の学部においてどのような研究がなされているのかについて生徒一人ひとりの関心や希望に基づいて事前学習を行うが、その点で、第2学年での『学部調べ』と関連しているし、実際に広島大学に足を運び大学や学部を見る第3学年でのそれは、具体的な場を目前にして将来の自らの在り方をより切実に考えるきっかけになるという点で、第2学年進路学習の発展学習でもある。

このように、年次の進路学習テーマに関連を持たせ、学年が上がるにつれそれが発展学習となることで、生徒たちにとって将来の展望がより確かなものになるように、中学3年間の進路学習は構想されている。本節の冒頭に述べた、「広島大学見学学習」が「当校第3学年にとって中学就学期の進路学習の集大成でもある」とはこのことを指している。

各学年での進路学習の目標と、それぞれの関わりは以

上のごとく。以下、各節で中学2ヵ年（2007年度～2008年度実践）での実際の取り組みを述べよう。

2-2. 第1学年『職業調べ学習』

(1) 目的

「仕事をする」とは一体どういうことなのか。中学校1年生の今、将来の自分はどのような職業に就いていると想像するだろうか。「アナウンサーになりたい」、「研究者になりたい」、「医者になりたい」、……。もしかしたらもう既にこの職業に就きたいという夢（進路）が決まっている人もいるかも知れない。その進路に向かって努力を続けていくというのも1つの方法かもしれない。しかし、早くから結論を1つ出してそれに固執し続けるというのは良い結果にならないこともある。成長と共に自分の世界の見え方が変わっていくのであるから、進路についての考え方も、ものを知れば知るほど変容・深化するものであると考えるべきであろう（広島大学附属福山中・高等学校 進路指導部，2009）。まずは、世の中にどのような職業があるのかを知り、将来の可能性を広げる。その職業に就くためにはどうすればよいのか、どのような人が向いているのか、自分にはその適性があるのかどうか、このようなことを調べることを通して、自分の将来について考えるきっかけをつくることを目的とした。

(2) 学習の実際

職業調べ学習は2007年9月～10月上旬にかけて、LHRの時間を用いて、表1の内容で進めた。

表1 職業調べ学習の日程

時	内容の概要
1	オリエンテーション
2	職業調べレポート作成①
3	職業調べレポート作成②
4	職業調べレポート作成③
5	職業調べ学習まとめ①
6	職業調べ学習まとめ②

当校では、生徒自身が自分の進路について意識を新たにし、今後の進路設計に役立てていく機会となるようお願い（広島大学附属福山中・高等学校 進路指導部，2009）、「進路に関する調査」を毎年11月に実施している。実施に当たって、まず、この調査項目の1つにある将来の希望職種の一覧を利用して、60個の職業を17個のカテゴリーに分け、各々の職業がどの部類に入るのかを選択させた。これには、この選択を通じて、多様な職業の広が

りの認識と、自分のなりたい職業の意識化とを期待するねらいもあった。その後、これから職業調べを行うにあたって、自分の調べる職業を3つ選択させた（一覧にない職業も選択可とした）。次に、「仕事をする」とはということかについて記述させた。これは職業調べ学習を行う前と後での生徒の〈労働〉観の変容について分析するためである。

こうした手順を踏んで、生徒たちは職業調べレポートを作成する。その際、「調べる内容」①その職業の内容、②その職業に就くためには、③その職業の適性（どのような人が向いているのか）、④その職業に就いている方たちの意見、⑤その他に調べたこと）や、「調べる方法」（書籍、インターネット）を設定することで、調べ学習の観点と具体的な方法を提示している。

さらに、学習のまとめとして、レポート作成後、職業調べを通じて新たに分かったことや、グループでレポートを読み合わせて気付いたことについて記述させた。最後に、作成した全員のレポートを職業ごとにまとめて、冊子にし、クラスで閲覧できるようにした。

(3) 学習の成果

調べ学習の事前段階において、労働についての考え方を書かせ、レポート作成後において、感想を書かせたが、これらの一連の活動により生徒の〈職業〉観・〈労働〉観の変化を捉えることができた。具体的には、職業調べ学習以前においては、「仕事はお金を稼ぐためのもの」という漠然とした認識を持つだけの生徒が多くいたが、調べ学習以後では、1つの職業が他のいろいろな職業と関わりを持つこと、仕事に就くまでの過程が具体的に理解できたことなどを記述する生徒が散見された。また、当初は自己の希望進路の特異さと実現の困難さに苦悩していた生徒が、同じ職業をテーマにしている同級生のレポートに触れて、種々の職業との接点の存在、就職の可能性の幅の広さに気づき、驚きを以て書き付けていたり、希望進路という点で同級生の多様性に気付いたりする感想が見えた。各クラスで班を構成し、最後の感想レポートを回し読みさせる試みの効果であろう。

2-3. 第2学年『学部調べ学習』

(1) 目的

第1学年において、生徒は社会の様々な職業に関する情報を集め、整理してきた。1つの職業に就くためには様々な道が存在し、その1つに高校を卒業して、大学で専門分野を学び、就職するという道がある。この道においては、大学の学部・学科選びが、自分の将来設計において非常に重要な意味を持つてくるだろう。第2学年では、その大学でどのようなことが学べるのか、そして、

その先でどのような職業に就けるのかについてまとめていく。多様な領域の存在、また大学と社会との関わりを知り、豊かな可能性の広がりを感じることで、自分の興味・関心の所在から将来のあり方を考えていくことを目的とした。

(2) 学習の実際

学部調べ学習は2008年9月～10月上旬にかけて、LHRの時間を用いて、表1の内容で進めた。

表1 職業調べ学習の日程

時	内容の概要
1	オリエンテーション
2	学部調べレポート作成①
3	学部調べレポート作成②
4	学部調べレポート作成③
5	プレゼン発表①
6	プレゼン発表② 及び 学部調べ学習まとめ

オリエンテーションで学部調べ学習の目的を、「進路指導資料集2008」(第8章 学部の概要)を用いて生徒に意識させ、4人ないし5人1組のグループをつくり、以下の10学部から探求したい学部を決定させた。

I：文学部 II：教育学部 III：法学部 IV：経済学部 V：理学部 VI：工学部 VII：農学部・家政学部 VIII：医学部 IX：薬学部・歯学部・保健看護学部 X：体育・芸術学部

なお、学部が重複しているもの(VII・IX・X)については、どの学部を中心に調べるか(1つでもよい)について、グループ内で話し合わせた。

調べる方法としては、「進路指導資料集2008」,「蛍雪時代4月号」を中心に、当校の進路学習センターに置かれている本やインターネットも利用させた。

調べる内容については、項目立てはせず、以下の内容は必ず調べるよう指示し、それ以外のことも自分たちで工夫して調べるよう指示した。また次時において、プレゼン発表を行うため、レポート内容の概要を模造紙に書くよう準備をさせた。

- ◇ 学部の系統(学部内ではどのような学科、分野が存在するのか。また、それらの関連はどうか。)
- ◇ 学科の内容(その学科で何を学ぶのか。)
- ◇ 卒業後は?

加えて、生徒には学部でなされている教育内容のみを調べるだけに留まらず、その学部が社会のどのような分

野に関わっているのか、その先でどのような職業に就くことができるのかなど、広い視野で調べ学習を行っていくことを留意させた。

以上の手順を踏まえて模造紙を利用し、プレゼン発表をグループごとに行った。なお、グループ内で役割分担をさせ、1グループの持ち時間は5分とした。また、全グループの発表後、自分自身がどの学部・分野に興味をもったかを作文させた。さらに、この学部調べ学習を通して、学部とはどのようなものか、分かったことについても作文させた。

(3) 学習の成果

この学部調べ学習では、多種多様な学部、学科の存在に生徒はまず驚いている様子であった。また、その学部からの卒業後の進路を調べることで、自分の興味のある学問内容が社会でどのようなつながりを持つのかを知る機会となり得た。このことは、いま自分が学校で学習している意義を、社会の側から考える契機となったようで、〈学習〉観の深化とおぼしき記述が散見されたことも本学習の成果であろう。一方で、本学習は個別に調べ学習を行うのではなく、グループで調べ学習を行い、模造紙によるプレゼン発表という形式で行うものであった。当初グループ内での学習への関与の深淺の差が顕著に見えたが、締め切りが迫るにつれて自主的に放課後作成したり、特徴的な内容を盛り込んだりして工夫をこらそうとする姿勢が見えた。発表での声量や説明の仕方に課題は残るものの、一生懸命に相手に物事を伝えようという意識はそれぞれのグループから感じることができた。このような「表現力」の育成もこの学習での成果の1つといえる。

3. 「大学」との出会い

3-1. 第3学年『広島大学見学学習』

本学年の中学1,2年生での進路学習は前節の通り。かかる進路学習を経験した生徒たちに対して、第3学年の進路学習では、「自分の興味関心のありようから将来の生き方を考え、進路についての目標を持ち、自己の課題にとりくむ。」という当校の進路指導の考え方に即して、その目的を「義務教育を終えようとしているこの中学校3年生の時期に、過去行ってきた職業調べ・学部調べの集大成として広島大学の教育・研究施設を訪れ実際の学問・研究の現場を体験し、各自の将来への展望をさらに大きく開ききっかけとする。大学とは?学問とは?研究とは?・・・大学のほんの一部に触れるだけであるが、そこから、各自の豊かな想像力を生かして、多くのことを感じ取ることを目的とする。」(「広島大学見学学習」)

コース別見学希望調査プリント)と設定し、具体的には「広島大学見学学習」に向けて学習を進めることを生徒に伝えた。

さて、取り組みの流れだが、事前学習(2009年9月～10月上旬)としてLHR時に表1の内容(時1～4)で学習を進め、「広島大学見学学習」は2009年11月2日(月)に実施した。

表1 「広島大学見学学習」の日程

時	内容の概要
1	オリエンテーション
2	広大見学レポート作成①
3	広大見学レポート作成②
4	広大見学レポート作成③
5	広大遠足
6	広大見学学習まとめ

なお、オリエンテーション時に、これまでの進路学習を通しての大学のイメージを確認しており、見学コース別研修を実施するため、その希望調査を行っている。見学コースは以下のi～vの通り。

i 理学部コース(両生類研究施設・放射光科学研究センター), ii 大学院先端物質科学研究所コース(量子・分子・半導体), iii 文学部コース(角筆資料研究室・考古学研究室), iv 工学部コース(建築製図・環境工学・風洞試験・船型試験水槽), v 生物生産コース(チョコレート科学)。

次に、学習の実際だが、「広大見学レポート作成」①～③時に、広島大学が発行している大学案内「広島大学で何が学べるか」やインターネットを準備し、指導者の側から項目立てはせず、それらを活用しつつ希望の見学コースで学べることをテーマとして調べ学習を進めた。加えて、実地見学時に質問したいことをまとめさせた。また、調べ学習を行うなかで、見学コース以外で自分の興味関心のある学部・研究内容が見つかった場合には、それらも調べたこととしてレポートにまとめさせた。

以上のような準備を経て、「広島大学見学学習」に臨んだが、本学習を通じて生徒たちに何が出来たのか。その分析と考察を、事前学習時に生徒たちが「大学のイメージ」について寄せた記述と、実地見学後に「広島大学遠足を通じて」について寄せた記述とを対象にして進めたい。

3-2. 生徒たちの〈大学〉観

そもそも、「大学」とは生徒たちにとっていかなる場所なのだろうか。むろん中学3年生に対するこの問いへの答えは観念的なものになるだろうし、慎重に答えようとすればするほど、それは、「学術研究・教育の最高機関として専門的な高等教育を行う学校」(国語辞典『明鏡』,大修館書店)という「大学」の辞書的説明に重なるだろう。実際に事前学習を行ったり大学見学に赴いたりする前であればなおさらだ。そのことは生徒たちの次のことばがよく伝えている。

- ① 大学は、興味あることに関して、今までより専門的にピンポイントで深く学ぶところ、というイメージがある。中学校や高校では、いろいろな教科を同時に勉強するから、あまり1つのことを深く掘り下げるのは難しいけど、それを自分の研究したいものに絞って、詳しく学べるものが大学だと思う。(3年・女子)
- ② 自分の好きなことや興味のあることについて専門的に深く調べ、実験などを通してそれを極めることが研究だと思う。／そして大学はその研究をするにあたって最適な設備や環境が整っている場所だと思う。(3年・男子)
- ③ 中学・高校とは違い、また一段とスケールの大きくなった「大学」という社会で、社会人になる準備や、自分のやりたい1つの学問を深く学び、新たな人間関係を築くところ。(3年・女子)
- ④ 中学校や高校では、色々な教科を同時に勉強するところだけでも、大学は1つのことを深く掘り下げるところ？(3年・女子)

举例①～④の傍線に見えることば(「1つのことを深く掘り下げる」(①)、「専門的に深く調べ」(②)、「1つの学問を深く学び」(③)、「専門的にピンポイントで深く学ぶ」(④))は、「専門的な高等教育を行う」という文言にぴったり重なりはしないが、同じ意味だろう。こうした傾向は、本進路学習の当初「大学のイメージ」について寄せた記述の多くに実は見られるもので、結局のところ、「高校生までと違って、専門的な研究をするところ。研究とは……何かを……調べていくことだと思うが、その何かはさっぱりだ」(3年・男子)とする例などが生徒たちの「大学」理解の現状をよく伝える。だが、辞書的な理解で具体性を欠いているにもかかわらず、その多くが「大学」に対して好感の情を書き付けてもいることに注意したい。例えば次の文章などが代表的なものである。

- ⑤ 私の中で、大学はテストが無くてサークル活動して自分の好みの勉強をする、もの凄く楽しいところというイメージがあります。だから、いきなり「研究」と言われても戸惑ってしまいます。「研究」とはあることがらを、できる限り追求することだと思います。分からないことを消化して吸収して、自分の将来に役立てるために、研究する。自分の好きなことを研究するのだからそれはとても楽しいものだと思っています。(3年・女子)

如上、「あることがらを、できる限り追求する」といった辞書的な説明(=「専門的な高等教育を行う」)を参照引用しつつ、「それはとても楽しいものだ」と締め括るあたりがそれである。もちろん、こうした傾向には生徒たちのおかれた言語経験、それは大学への好悪の眼差しを醸成する周囲からのことばによる働きかけのことだが、そうした事情が大きく関わっていようが、それはそれとして、さしあたってここでは、生徒たちの「大学」理解と感じ方とのつながりに注目したい。

挙例⑤の生徒の文章は、大学での研究はよく分からない(=「いきなり『研究』と言われても戸惑ってしまいます」)が、きっと「楽しいものだ」とつなげている。そしてそこに、研究する「あことがら」は「自分の好きなこと」だからという理由が記されてもいる。これは「大学」への好感の情の立ち上げ方を具体的に教えてくれるが、こうした「大学」理解と感じ方とのつながりは⑤の生徒一人のものではない。というのも、振り返れば、挙例①～③にも「大学」で学ぶことや研究することは〈自分の好きなこと〉だとすることば(「自分のやりたい」①)、「自分の好きなことや興味のあること」②)、「自分の研究したいもの」③)があった。「大学」で具体的に何を学び研究するのか分からないけどとにかく良いところだと大部分の生徒が理解もし、感じもしている接点には、おそらくそうした期待があったのだろう。

さて、この期待感を、向学心の厚さを背景にしたものと見ると少々事情が違うようで、多くの生徒にとってその期待感の彼岸には複雑な思いがあった。例えば、それは挙例⑤の生徒が「大学はテストが無く…(略)…自分の好みの勉強をする」場所だと記すところに少し窺えるようなものである。いま少しその思いを形にするならばそれは次のようになる。

- ⑥ 大学とは、自由な場所だと思う。誰かから強制されて、誰かの評価を気にしてがんばる必要のないところだと思う。管理されることもないし、何をするにも自分の判断でできるところだと思う。勉強もそうだし、生活も遊びもそうだ。自分の好きな勉強も気

の向いたときに思いっきりできるし、嫌と言うほど遊びもできる。自由でのびのび振る舞えて本当に楽しいところだと信じている。(3年・男子)

大学は、評価や管理がなく、自分勝手に振る舞える自由な場所だろうし、そうしたい。挙例⑥の生徒の思いを換言すればそのようになる。その上で、「自分の好きな勉強も気の向いたときに思いっきりできる」と期待しているのである。

このような自由への手放しの賞賛が、〈自分の好きなこと〉が研究できるとする多くの生徒に共有されていたことであろう。漠然とした「大学」理解を示しながらもそれへの好感の情を立ち上げる、その背景にはかかる認識(大学=自分にとって自由な場所)が介在していた。

3-3. 大学との出会い

では、このような多くの生徒たちが実際の大学に出会って何を感じたのだろうか。

- ⑦ 思った以上に本格的だったことには驚いた。(3年・男子)
- ⑧ 1つの分野を極める先生方のお話が聞けたり、「本物」に触れられたりするところが「大学」なんだなと思いました。(3年・男子)
- ⑨ 自由というのが第一印象でした。皆、私服で自由に大学に通っていました。また、何もかも施設が大きくて図書館も3～4階までありました。学食もラーメン一杯255円という超お手頃値段でした。(3年・女子)

上に掲げるとく、構内の広さや施設の大きさ、学食のリーズナブルさや大学での講義内容の難しさ、扱う物の貴重さなどという点で、思った以上でひどいという感情がまずは散見される。観念でしかなかった大学を実際に見て惹起される感想として率直な声と言うべきだろう。だが、そうした声に混じって、次のような複雑な声も聞こえてくるのである。

- ⑩ 「大学」というのは、何もないゼロから自分自身で積み上げていく学びの場なのかなあ、と思いました。計画を立てて実行する、ということ自分だけでやらなければいけなくて、中、高よりも計画性が重要になってくるなあ、と考えました。(3年・女子)
- ⑪ 大学はまず、とても広かった。外観も内装も、学ぶ事柄も違う建物が幾つも建ち並んでいた。学生の雰囲気も様々で、みなそれぞれ活気があった。1つの

場所に、自由で無限の選択肢が詰め込まれていて、また、それらが同じ敷地にあることで更なる可能性が広がられている。だから大学という形態に意味があるのだろう。そしてそこで自分を導くのは、確固とした意志でなくてはならない。なぜなら自分の一歩一歩に、将来への責任がかかっているからだ。私にとって大学はまだ広すぎるかも知れないと考えた。(3年・女子)

大学は思った以上だったとするのは他のものと同様だが、そのことに加えて大学の自由さを踏まえて書いたとおぼしき記述箇所(傍線)があることに注意したい。というのも、事前学習時では、大学の自由さに注目した生徒であれば、そのことへの手放しの賞賛を記述していたものだが、それとは少し記述の質が違うからだ。そこには、大学とは「1つの場所に、自由で無限の選択肢が詰め込まれていて」(⑩)、そういう場所では「計画を立てて実行する、ということ自分だけでやらなければいけない」(⑩)、「自分を導くのは、確固とした意志でなくてはならない」(⑩)と記されているのである。なるほど、評価や管理のない世界(実際には勿論評価も管理もあるのだが、その辺りは今回の見学ではまだ感得できなかったようである。)では何をしても確かによいだろうが、それは、当人にこれというものがなければ何をしてもよいのか分からない不自由な世界でもあること。穿って聞けばそうしたことに気付いたとする声なのだろう。

「自分にとって自由で嬉しいな」と手放しの賞賛の声を上げていた生徒たちに出来た出来事とはおそらく先述のようであったろう。もちろん、中には大学の自由な雰囲気実際にふれて、相変わらず手放しの賞賛の書き付ける生徒もいたが、同じ経験を通して、挙例⑩、⑪のような感触を書き付ける同級生が事実として存在しているということが重要だろう。

さて、「広島大学見学学習」で生徒たちに出来た出来事とは以上のごとく、結果として自由に対する複雑な思索をしようとする構えというべき姿勢がきっとこの学習を通じて獲得できたはずだ。一方で、その姿勢が大切な眼差しを育んだようで、それは、挙例⑪の生徒の文章に結論として見える、「私にとって大学はまだ広すぎるかも知れない」(二重傍線)ということばが良く伝えている。次に挙げる文章もその眼差しが生じたとおぼしき一例である。

⑫ 大学に入ると私たちはもう「学生」になります。自分の進む道を決定し、それに向かってひたすら学び続けるのと同時に、サークルや部活にも励み、「街

に近い空間で仲間達とともに明るい未来へ邁進する……、そういうところだと考えたと思います……。学生になると、もう自分で物事を決めていけないといけない、社会に向けて出発しないといけない……。自信ないです。でももうあと三年しかない！もっとみんなとわいわいしていたい！！大学の皆様はみんな大人で真剣に見えました。大学、行きたいようで行きたくないような……そんな複雑な感じです。(3年・女子)

挙例⑫の生徒も、結論として「大学、行きたいようで行きたくないような……そんな複雑な感じ」(二重傍線)と語っている。だがそれは、「真剣に」「自分で物事を決めてい」くことの必要性和難しさを確かに受け取ったため、先掲⑩の生徒の結論もその意味で出されたものだろう。大切な眼差しというのはそうした受け取り方を導くもの。というのも、この結論は、今の自分と大学との距離をはかろうとする思考の結果、至ったはずで、そこには将来の自己の在り方を、自分の今の現実根ざして考えようとする眼差しが確かにあるからだ。そのような大切な眼差しが生徒に生じてもいるのである。これこそ、この進路学習の成果である。

以上のように、本当に自由な環境で自分はそこで何がしたいのかと、自らの在り方を相対化するようなきっかけとして「広島大学見学学習」はあった。そこで生じた出来事は、進路選択での決意を支える生徒一人ひとりの内的な力の育成に十分期待できるものであろう。

4. おわりに

2009年11月2日(月)に実施した「広島大学見学学習」で生徒たちに生じた出来事と、進路学習の成果は以上の通り。本学習を中学3ヵ年の集大成と位置づける見方から取って付言すれば、『職業調べ学習』と『学部調べ学習』で将来の〈私〉を緩やかに想起させ、『広島大学見学遠足』で差し迫った問題として今の〈私〉の課題を自覚させるという点で、この階梯は効果的なものであった。また、挙例⑫、⑬の生徒が伝えるごとく、自己内対話が無理なくできていることが、かかる取り組みと生徒の発達段階との幸福な出会いを良く示している。さらに、それが、今後の進路の具体化の局面で力を発揮するであろうことは前節に述べた通りである。

最後になったが、本稿で取り上げた「広島大学見学学習」では、企画・実施に際して当校の多くの教員、広島大学の教官に尽力いただいた。また、本学年の進路学習での成長の一端を報告したわけだが、その成長は、学習を指導する上で諸先生方の御助言、御協力賜ったことである。末筆ながら記して御礼申し上げたい。